

「説唱芸能＜唱南游＞の語り」 続編V

訳・廣 田 律 子

※14号に続き訳を試みる。

歌う 「夫人伝」にはこの国のことはさておき、後にこの話しを続けよう。

「夫人伝」には、さらに福州の黄宅のことを語る。黄大人は心の中でひそかに考える。

息子の三日祝いの日に盧山の法を奉じて、息子の婚約を定めた。今、両方の子が生長して大人になった。

神娘が法の伝授を受けてから家に帰ったので、期日を選んで花嫁を迎えるべきだ。

暦で吉日を選んで、人を遣わして婚礼の知らせを陳宅に送った。

老法師はこの知らせを受取ると、心配する。

台詞 奥さんは歩いて来て聞いた。「老法師！あなたはいつも嬉しそうな顔して来たが、今日は心配そうな顔をしている。どんなことがあったのか。」

「このことはもういい。俺はこれを聞かせよう。当時、家の娘十四が生まれた。黄家では文淹が生まれ、三日祝いのために俺を招いた。その時、家の娘の命数を占って、十四の命数がよいと言われ、あの家の文淹と縁を結ぶように乞われた。そして、着物の裾の一角を切取って箱に入れた。家の人に話さずに、このことはそのまま放っておかれてきた。今日、黄家は婚礼の知らせを送って来て、十四が嫁入りするように定めた。娘は盧山の教えに帰依したので、行くのか、行きたくないのか、分らない。だから心配している。」

「おー、そうか。林嫁を南雲楼に行かせて、娘の気持を見通してみよう。黄宅に行きたいなら、もっとも好いが、行きたくないなら、わたしたちは別に案を立てよう。」

「あなたの言うことはもっともだ！」

歌う このことを林嫁に知らせると、林氏は南雲楼に上がった。

廬山神娘は迎えに出て、姉妹二人は面会する。

お姉さんは何のご用か、何のために南雲楼に上がって来られたのか。

わたしはここに上がったのは他のことではなく、お妹さんの縁組のことを話したい。

目上の舅姑ごは年寄りで忘れがちになって、ずっとお妹さんの縁組のことを話さなかった。

「お姉さんおかしいと思わないで下さい。わたしはそんなつまらないことを聞きたくない。」と神娘は言う。

わたしは廬山の仏の教えに帰依して、修行読経して悟りの心を持つようになった。

台詞 「お妹さん、わたしはつまらないことを言った。ご免なさい！あなたが修行読経して廬山の正しい教えに帰依したことを知らなかった。悪く思わないで下さい！」

歌う 言葉巧みに廬山の法に帰依した十四をなだめて、林氏は南雲楼を下りる。

目上の舅姑に伝えて、妹さんは修行読経して悟りの心を持つようになったと。

台詞 「老法師！あなたは黄宅に行って、家の娘が廬山に帰依したので、黄文淹は別の家の嫁を娶るように言って下さい。承知するなら、もっともよいが、承知しないなら、別に思案しよう。」と奥さんは言う。

「そうだ！」と老法師は答える。

歌う 老法師は身なりを整えて、家から出かける。町にある黄宅に行くと、受けつけの人が奥へ知らせる。

台詞 「陳宅の旦那さん、どうぞ！」と黄大人は迎えて言う。「黄宅の旦那さん、ごきげんよう！」

「おー！姻戚同志で、文淹も呼んで来よう。」

「いいえ、家の十四は廬山の教えに帰依したので、お宅に来たくないのです。お宅の文淹には別の嫁を娶るようお願いする。」

「何、三日祝いの時にもう定めたことだろう！今、何かの言種を言うことができようか。」

「いいえ、俺上元がお願いをするのではない。家の神娘がお宅に来たく

ないと言うのだ！」

「そうか。俺は黄文淹に聞いて見よう。」彼が承知すれば、もっともよいが、彼が承知しないなら、婚礼の期日を定めた通りにしよう。」

「よろしく願います。」黄大人は下男を遣わして文淹を呼んで来させる。

歌う 書斎にいる黄文淹は知らされると、外の庁堂に出てお父さんを拝む。

お父さんは何かご用がおありか。何のためにわたしを呼んだのか。

台詞 「今話さなければならぬことがある。三日祝いの時に、廬山の法によって陳十四と縁を結んだ。今両方とも成長して大人になったから、婚礼をするはずだが、神娘はもう廬山の教えに帰依してこの家に来たくないと言い、お前が他の家の娘を娶るようにと言った。お前の考えはどうか。」

歌う お父さん！ 楚霸王は妻に別れを告げたが、どの家の男が妻と別れたいだろうか。

神娘が廬山の仏の教えに帰依するなら、わたしはいつまでも独身で妻を娶らない。

台詞 「陳伯父さん、お聞きになっただろう」と黄大人は言う。

「では失礼、では失礼！」と老法師は続けて言う。

「昼食を取らないか！」と黄大人は言う。

「気を揉んでいて、昼食を食べられようか！」

「そんなら、その期日にしよう！」

「いいえ、またご返事しよう。」

歌う 老法師は立って、城門を出て家に帰る。

奥さんは迎えて、ゆっくり話し出す。

台詞 「老法師！ 黄宅はどんなに話したか。」「俺が黄宅に入ると、黄大人は話し出した。『陳宅の旦那さん、どうぞ！』『黄宅の旦那さん、ごきげんよう！』と俺は言った。『姻戚同志で、文淹を呼んで来よう。』と彼は言った。『いいえ、家の十四は廬山の教えに帰依したので、お宅に来たくないと言った！お宅の文淹は別の嫁を娶るようお願いする。』『三日祝いの時にもう定めたことで、何かの言種を言うことができようか。』と彼は言った。『俺上元がこんなお願いをするのではない。家の娘十四が承知しない。』『そんなら、俺は黄文淹に聞いてみよう。』と彼は言った。文淹は出て来て、

何を言ったか、お前は当ててごらん。黄文淹はこう言った。

歌う 『楚霸王は妻に別れを告げたが、どの家の男が妻と別れたいだろうか。
神娘が盧山の教えに帰依するなら、わたしは一生独身で妻を娶らない。』

台詞 『陳宅の旦那さん、お聞きになっただろう。婚礼はその期日にしよう！』
と黄大人は言った。」

「黄宅の息子はむしろ独身になるとも、別の家の娘を娶りたくないのだ。黄宅の先代のあとを継ぐ人があるべきだから、こんなふうになっては絶対いけない！わたしたちはもう一度林嫁を遣わして十四に聞いてみよう。娘は礼儀をわきまえる人だから。」と奥さんは言った。

歌う このことを林嫁に知らせると、林氏は南雲楼に上がる。

盧山神娘は迎えに出て、お姉さんを部屋に迎える。

お姉さんは何のご用があるのか。何のために南雲楼に来たのか。

わたしは南雲楼に上がって、お妹さんの縁組のことを話したい。

先日、あなたに冗談を言ったが、今度はあなたに本当のことを話して上げる。

黄宅の奥さんは賢明有徳な人で、家のお母さんは南雲楼で焼香していた。

黄宅では文淹が生まれ、家ではお妹さんが生まれた。

二日目に黄宅の下男が来て、お父さんに三日祝いのことを願った。

黄宅の旦那さんは、何を考えていたか、分らないが、お妹さんの命数を占った。

お妹さんの命数がよいと思って、着物の裾の一角を切取って、文淹との縁組を定めた。

お父さんは家に帰ってから、皆の前でこの事実を言わなかった。

今年、お妹さんは二十一歳になり、黄宅の婿も同じ年になった。

お妹さんは盧山から家に帰り、今日黄宅から婚礼の知らせが来た。

お妹さんが黄宅に行くように願ったので、この楼に上がって相談するつもりだった。

お妹さんは盧山の仏の教えに帰依したと、お父さんは黄宅へ返事した。

黄宅の文淹は、妻を娶るならお妹さんより外考えられないと言った。

お妹さんが盧山の教えに帰依して変わらないなら、一生独身で妻を娶ら

ないという。

お母さんのご飯はおいしいが、夫のご飯が長く、兄弟のご飯は辛いものだ。

お母さんに育てられて大人になり、夫を助けて夫婦の暮しが長い。

お妹さんは礼儀をわきまえるなら、早く黄宅の夫のもとに行く方がよい。

お妹さんが黄宅の婿に従って行けば、家の両親は何より嬉しいだろう。

お妹さんが黄宅の夫に従って行きたくないなら、両親は気をもんで命すら危うい。黄宅の旦那さんは必ず迫って来て、役所に訴訟を起す。

県令が裁判すれば、お妹さんを黄宅に行かせるに違いない。

姻親の間柄でそうなれば、お妹さんは汚名を長く残すことになるだろう。

お妹さんは礼儀がよく分るから、さっそく黄宅に夫に従って行く方がよい。

世間にこう言う言葉がある。天地は和合して陰陽が連れ添う。

台詞 「お姉さん！あなたの話は本当に長いものだ。長いとか、夫とか、そのそばとか、天とか、なんと長たらしいものだろう。天地が和合して陰陽が連れ添うと言うのはどういう意味か、聞かせて下さい。」と神娘は言う。

「お妹さん！わたしはどこかから聞いてきたものをそのまま伝えるだけだ。どういう意味か、分らない！」

「お姉さん！そんなやさしいことではない。わたしはもう盧山に願をかけた！」

「盧山に願をかけたと言うのね。ある人は仏門の前で祈りをしたが、それも変通できるのだ。言いつ放しにすることもできる。盧山に願をかけてもかまわない。お妹さんはそんな人とは違う。あなたは修行する人で、『王さまの言葉は勅旨になり、仏の言葉はお経になる』として、言ったことを守るのだろう。願ほどきすればいい！」

「お姉さん！願ほどきできるのか。」「願ほどきできることはわたしが保証する！」

「わたしが夫に従って黄宅に行くには、三つの大事な事をしてくれなければならない。」

「言ってごらん、わたしはよく伝えると保証する。」

「第一、黄姓に知らせることは、願ほどきのために、十匹の豚、十匹の羊を用意しておく事。」

「お妹さん、あなたはあの家に行くことさえできれば、十匹どころか、二十匹も用意できるのだ。」

「第二、法師の家の者は嫁入り道具って行かない事。あの家は役人で、裕福な家だが、わたしたち道教の者は何も欲っさない。第三、神籠を黄宅に担いで行き、盧山の法器を持って行かなければならない事。」

「家中を掃除し、赤い灯ろうをかけておく。婚礼はめでたいことだから、赤い灯ろうをかけるべきだ。」

「新婚の部屋を改装しなければならない。上には天井板を改装し、下の地面に絨毯を敷いておく。」

「お妹さん、地面、天井板とかどういうことか。」

「世間にはこんな言葉がある。天と地に隠すことができて、人に隠すことはできない！」

「家のお嬢さんは本当に利口だ。天や地に隠すことができて、隣の家に隠しがたい。お妹さん！こんなに伝えよう、言いなおしをしてはいけないよ！」

歌う 聡明利口な林嫁は、妹の前で後悔してはいけないと念を押す。

内壇娘々馬一駕、林氏は南雲楼を下りる。

知らせられた舅姑は喜んで、人を遣わして黄宅に知らせる。

黄宅の老若は喜んで、十匹の豚と十匹の羊を用意して陳宅に送る。

盧山法のこもる南雲楼に知らせると、盧山神娘は南雲を下りる。

台詞 「次兄さん！あなたは九層の台を組立てることができるか。」「九層の台を組みた一た一たてるのか、玄一玄人だ、玄一玄人だ。」「あなたは九層の台を組立てて下さい。わたしは十匹の豚や十匹の羊で願ほどきするから。」

歌う 二法師は九層の台を組立てて、盧山神娘は九層の台に上がる。

祖師にお香を捧げる案をしつらえ、壇に立って法を行って願ほどきする。

頭に神雲や神額をかぶり、身に神衣や神袴を着る。

足もとに占い具が置かれ、手で印を結び、口で盧山の玄妙な法の本を唱える。

左手に鈴を持ち、右手に竜角を持って、竜角の音がびいびいと霊壇にひびく。

始めて竜角がびいびいとひびくと、竜角の音が盧山、茅山にひびきわたる。

盧山、茅山、新州竜虎山、神兵、神将、雷兵、地将は三壇に集まる。

神娘は恩返し、願ほどきをし、雷や太鼓や竜角が香壇に上がる。

雷の震えるように竜角が三回ひびくと、盧山の師には事情が分った。

台詞 「どこの竜角がひびいているのか」と師は言う。祖師は竜鳳の占いをし、
「あー、あの陳十四は盧山を出てから、盧山の正しい教えに帰依すると
言って、結婚したくないとしたが、彼女は自分をまげずにがんばることが
できない！観音仏はとっくに彼女の縁組を定めた。彼女は盧山のことをよ
く覚えてくれればいいのだ。」と言う。

歌う 内壇佑聖三駕、雲三片、銭三十、内壇に集まって願ほどきを受ける。

光陰は風が吹くように早く、月日のたつのが梭が動くように、風が雲を
吹き飛ばすように速い。

婚礼の日がまだ来ないうちに、両方とも掃除して赤い灯ろうをかけてお
く。

新婚の部屋を改装し、左右に對聯がかけてある。

左の軸には、「今日新婚の部屋でともに楽しむ」とあり、右の軸には、「明
日科挙合格者の掲示に名前がある」とある。

五代まで栄えるという言葉が左右に書かれてあり、鳳凰がともに鳴く絵
が部屋の中に貼ってある。

互いに盃を交換することやともに食事を取ることを準備し、夕方の行事
を定めた。

下男たちは嫁入り仕度をして、先に神輿を黄宅に担いで行く。

台詞 「この神輿をお宅のどこに置いていいか。」と下男は黄宅の人に聞く。

「花嫁の嫁入り道具だから、庁堂に置く方がいいだろう！」

「それはだめ、あんなものを庁堂に置けば、文武の役人が来て、法事を
やるのかと言われたら、聞き苦しいだろう！あれを柴小屋に担いで、柴で
囲んでおいたら厄払いできる。」とある下男が言う。

歌う 神輿は柴小屋に置かれ、新婦の乗る花かごが花嫁を迎えに陳宅に行く。
爆竹が鳴らされて、新婦の乗る花かごが家に入り、花かごが外の庁堂に
止まって新婦を待つ。

下女が沸いたお湯を南雲楼に送り、神娘は湯浴して花嫁の身なりをする。
内壇娘々馬一駕、盧山神娘は花嫁の身なりをする。

頭に七尺の赤い布をかぶって、身に青布の着物と黒い布の袴を着る。
下女を伴って部屋を出て、外の庁堂で目上の両親を拝む。

老法師は言付けて、娘によく言含める。

神娘は今日夫に従って黄宅に行けば、目上の舅姑に孝行すべきだ。

夫は一丈なら、妻は一尺、夫は君で妻は臣だ。

夫は深山の香木で、妻は木の下の一本の藤だ。

藤が香木に付きまとして、夫婦はお互いに和睦するはずだ。

神娘は言付けを聞いて頷くと、目上の方に謝礼をして花かごの中に乗込
む。

花かごに乗込むと、涙を流す音が三回聞え、赤や白の米で厄払いをする。
陳宅は戸を閉めて運を留め、爆竹の音の中で花かごが立つ。

玉の笛の音が南から来て、四人が赤い花かごを担いで花嫁を迎えに来る。
沸いたお湯を書斎に送られ、黄文淹は湯浴して花婿の身なりをする。

内壇小衆神一駕、黄文淹は花婿の身なりをする。

花かごの前に行ってお辞儀をし、花嫁は花かごを出て答礼をして神さま
を拝む。

天地が長く存在するようにともに新婚の部屋に入り、互いに盃を交換し、
食事をともに取る。

無用の者は離れに去り、扉が閉められ、十の指で頭にかぶっている赤い
布を除ける。

小説を語るように「夫人伝」を扱ってはならない、「夫人伝」にむだ話を
入れるべきではない。

もしむだ話を「夫人伝」に入れれば、天上の法律を犯すことになり許さ
れない。

馬の蹄や馬の鈴の音がチリンチリンとして夜明けまで騒がしい。

光陰が早く過ぎて夜があけて、男が衣冠を調べ、女が化粧する。

新婚の部屋の戸が開けられて、皆が祝いを述べ、飾り物の麒麟も部屋の外でおめでとうと言うようだ。

花婿は外の庁堂でお客さまのお相手をし、下男たちはこっそり話しをする。

台詞 「福さん、寿さん！昨日の夕方にホンホン、ラーラーという音がして、ずいぶんおどろいた！俺はちょうど台所でおかずを作る手伝いをしていた。外へ出たばかりで人に押さえられて、大変びっくりした。」と一人の下男は言う、「俺は酒席に招く人の名簿を書いて、それを持って外へ出ると、やはり人にしっかり押さえられた。以前こんなことはなかった！」ともう一人の下男は続いて言った。「おお！神娘が来てから、昨日の夕方にホンホン、ラーラーと音がした。どんな妖怪がついて来て、俺たちをからかっていたのだろう。」「旦那さんは役人、若旦那は書生で、神娘は鬼を捉える主だ。妖怪は彼らにわざと悶着を起す度胸があるのか。」

下男たちが蔭でこういう話しをしているのが黄文淹にははっきり聞えた。部屋に帰って神娘に伝えた。

神娘はそれを聞くと疑って「あなたはどこから聞いたのか」ときく。

「下男はあなたが来る時、妖怪をつれて来た。昨夜ホンホン、ラーラーと音が立って、ずいぶんおどかされたと言っていた。」「どんな妖怪がわたしについて来たか。誰がそんな太い胆があるのか。神簞を担いで来てどこにおいたか、下男に聞いて下さい。」と神娘は言う。

文淹は部屋を出て、下男に聞く。「お前、担いで来た神簞をどこにおいたのか。」

「俺の担いだものじゃない、六さんが担いだ」「八さんが担いだ」とある下男がいう。「そうじゃない！六さんとお客が担いで来た。」ともう一人の下男はいう。

歌う 神簞を柴小屋に置いて、柴でそれを囲んで厄払いする。

黄文淹は部屋に帰って、その話を神娘に聞かせる。

台詞 「おや！家の下男はそっかしい者ね。神簞を柴小屋に置くと、盧山の法器がそこに置くべきものでなく、盧山、茅山の兵や将が不安になって、

さわいだのだ！」「わたしはもとは七日間立ってから部屋を出るつもりだったが、祖師壇をしつらえなければならないから、三日目に部屋を出よう。」と神娘は言う。

歌う 神娘は三日目に自分の部屋を出て、祝宴が終わってから客が帰って行く。

台詞 神娘は自分の部屋を出て、下男にその神箒を担ぎ出させて、外の庁堂に置いた。神箒を開けて、法器を取り出す。

歌う 法の壇を立て、祖師の案をしつらえて、壇に立って法を行って整える。頭に神雲や神額をかぶり、身に神衣や神袴を着る。

足もとに占い具が置かれ、手で印を結び、口で盧山の玄妙な法の本を唱える。

左手に鈴を持ち、右手に竜角を持って、竜角の音がひびひびと靈壇にひびく。

始めて竜角の音がひびいて、盧山、茅山にひびきわたった。

盧山、茅山、新州竜虎山、神兵、神将、雷兵、地将は三壇から降臨し、徳勝壇に集まる。

内壇佑聖三駕、雲三片、錢三十、三壇の神々は徳勝壇に集まる。

『夫人伝』は七日目まで話して、婿の家の招き知らせが陳宅に送られた。

台詞 「お父さん！今日黄一黄宅が知らせを送って来たのね。どういう事か。」と二法師は言った。「婿の家に行くことだ！」「お兄さんは行ってはいけない。足が不自由で、足の不自由な兄さんと言われたら、聞苦しい。」「俺を行かせてくれ！あなたは鼻垂らし人で、おいぼれだ。俺の方がましだ！」

「お前は自分がましだと言うが、お前が行けば、お箸を取り上げて、風が竹を吹くようにさっさと一膳、もう一膳食べてしまうだろう。俺たち道教の家ではかまわないが、お前の義弟の家は役人で、上等の家だ。そんなに食べてはだめだ。」

「あなたはおいぼれだ！俺一俺は妹の処に行けば、行儀よーよく食べるよ。」

「そんなら、行ってもいい！」

歌う 二法師は衣冠をきちんとして、家を出て行く。

町に入って黄宅に来ると、門番は黄宅の人に知らせる。

中門を大きく開いて迎え、二法師を奥の方へ案内する。

家の中でお茶や菓子を食べてから、二法師は奥へ行く。

台詞 二法師は神娘の部屋に入って、「三―三―三番目の妹さん、お父さんは鼻垂らし人で、ここに来ない。」と言う。

「長兄は。」「長兄は足が不自由だから、俺が来た!」「あなたは風が竹を吹くように食べるのね!」「お宅に来て、俺は行儀よく食べる。」

「お父さん、ありあわせの食事をさせて下さい。食事を済ましてから帰らせます!」

黄大人は神娘の言う通りに、神娘の前でお酒やご馳走を出させた。

「わたしは一本の糸をあなたの着物の裾につけて、その一端を板壁の隙に通しておく。わたしがその糸を一度引いたら、おかずを取りなさい。」と神娘は法青に言う。神娘は隣の叔母さんに呼び出されたので、その糸をひっぱる人がいなくなった。

二法師は糸を引っぱる人がいないからそこに座ったまま一度も箸を取らない。

「二番目の伯父さん、どうぞ!」「はい、はい、はい。」と答えたが、法青はやはり食べない。

「二番目の伯父さん、どうぞ!」「はい、はい、はい。」と答えたが、法青はやはり食べない。

「二番目の伯父さんは無茶苦茶に食べるそうだが、今日はこんなに行儀よくして、食べないね。」と黄宅の人は言う。

二法師は機嫌が悪くなったが、口をきくことができない。「三―三―三番目の妹、俺はもうお前の家に来ない。」

歌う 二法師は家に帰ってから、もう黄宅に行かなかった。

この『夫人伝』は一段落ずつ語って行くから、このことはさておき、他のことについて語ろう。

台詞 さて、南洋大海では金鶏賊が出ていた。その賊は三百六十隻の賊船をもっている。彼らは福州盧山神娘は大金を作ることができると聞いて、福州に十万両の銀を納めるように強要した。

歌う もし十万両の銀を納めてやれば、その賊は他の地方へ行って、ここは無

事になる。

十万両の銀を納めないなら、福州の城内がことごとく掠奪されてしまう。

地方の文武の役人が知らせを受けるや、文武の役人ともびくびくする。

文官は輿に乗り、武官は馬に乗って、輿や馬が黄宅まで飛ぶようにやってきた。

門番の知らせで迎えに出て、正門を大きく開いて迎える。

文武の百官は家に入って、知府黄大人に会う。

お茶や菓子でもてなして、大人はゆっくり話し出す。

台詞 「皆さん、何のご用でここに来られたか。」

歌う 南洋大海では金鶏賊が出て来た。その賊は三百六十隻の賊船をもっている。

神娘が大金を作ることができると聞いて、俺らは福州に十万両の銀を納めるように強要した。

もし十万両の銀を納めてやれば、その賊は他の地方へ行って、ここは無事になる。

十万両の銀を納めないなら、福州の城内がことごとく掠奪されてしまう。

台詞 「神娘に聞いていただきたい。その賊を退治できれば、退治してもらいたい!」「二階に上がって彼女と相談してみよう。」と黄大人は言う。黄大人は二階に上がると、「神娘!」と呼ぶ。「お父さんは何のご用か。」

歌う 南洋大海では金鶏賊が出て来た。その賊は三百六十隻の賊船をもっている。

神娘が大金を作ることができると言って、福州に十万両の銀を納めるように強要した。

もし十万両の銀を納めてやれば、その賊は他の地方へ行って、ここは無事になる。

十万両の銀を納めないなら、福州の城内がことごとく掠奪されてしまう。

台詞 「文武百官大人はお前がその賊を退治できるかと聞いてきた。できるなら退治してもらいたい!」「お父さん!退治できるとおっしゃって下さい。」

「おー、退治できるとはいいいことだ!」年寄りの大人は二階から下りて、文武の役人に知らせた。「退治できる。」文武の百官は喜んで、外の庁堂で

待ちかまえる。

神娘は一片の雲に乗って、ひとつに括った金の鉤を南洋大海に放っておく。神娘は神風で扇ぐと、三百六十隻の賊船を福州上港に送った。

神娘は雲に乗って家に帰った。二階に上がってから、黄文淹に、「あなた！あなたは紙の舟を切ることができるか。」と聞く。

「読書人だから紙の舟を切るのは玄人だ。」

「玄人ならいい！あなたは紙の舟を切って、墨で点をつけて下さい。一隻に一点つけ、二十隻なら二十点をつけ、三十隻なら三十点をつけ、四十隻なら四十点をつけ、五十隻なら五十点をつけ、百隻なら百点をつけて下さい。」

黄文淹は紙の舟をよく切って、点をはっきりつけておく。

神娘は水を入れた銅の鑊を二階の竈の側に置き、紙の舟を銅の鑊の中に入れておく。

歌う お香を焚く案や祖師の案をしつらえて、壇に立って法を行って整える。

頭に神雲や神額をかぶり、身に神衣や神袴を着る。

足もとに古い具がおかれ、口で廬山の玄妙な法の本を唱える。

左手に鈴を持ち、右手に竜角を持って、竜角の音がぴいぴいと霊壇にひびく。

二回目竜角の音がぴいぴいとひびいて、その音が廬山、茅山、竜虎山に届き、神兵、神将、雷兵、地將は雷や太鼓や竜角の音の中で香壇に上がる。

三回目の竜角の音が雷が震えるようにひびいて、三壇に集まった神々が賊兵を退治する。

神娘は廬山の法を施して、川や海を干して賊船を退治する。

ぴかぴか光る神剣を手に持って、銅の盆に指すと、紙の舟がひっくりかえる。

銅の盆にある紙の舟が十隻ひっくりかえると、川の賊船が十隻ひっくりかえる。

銅の盆にある紙の舟が二十隻ひっくりかえると、川の賊船が二十隻ひっくりかえる。

銅の盆にある紙の舟が三十隻ひっくりかえると、川の賊船が三十隻ひっ

くりかえる。

銅の盆にある紙の舟が四十隻ひっくりかえると、川の賊船が四十隻ひっくりかえる。

銅の盆にある紙の舟が五十隻ひっくりかえると、川の賊船が五十隻ひっくりかえる。

銅の盆にある紙の舟が百隻ひっくりかえると、川の賊船が百隻ひっくりかえる。

銅の盆にある紙の舟が二百隻ひっくりかえると、川の賊船が二百隻ひっくりかえる。

銅の盆にある紙の舟が三百隻ひっくりかえると、川の賊船が三百隻ひっくりかえる。

三百五十隻の賊船をひっくりかえし、盗賊や賊兵を退治した。

台詞 文武百官は長く座って、心に疑いが起った。「神娘はまだ賊を退治に行かないね。黄大人もう一度聞いて下さい。」黄大人はすぐに二階に上がって行くと、神娘が迎える。

「神娘！文武の役人は、お前が賊を退治できるなら、早く退治して下さいと言った。」

「お父さん、もう退治したと彼らにおっしゃって下さい！」

「お前の法は大したものと言われるが、お前は自分でも大した腕と言っているがね、お前は家からでることもしないのに、自分が賊を退治したと言うのか！」

「あなたは信じないなら、お城の上に登って、はっきりごらん下さい。三百六十隻の賊船は三百五十隻退治された。十隻残っている。」

「お前はそれを退治するには、全部退治するはずだ。十隻残して炎の種にするのか。」

「もともと残さずに退治するはずだったが、お父さんのお話しでとぎれてしまった。あの十隻を残して種にしよう。海水が乾かなければ、海賊が絶えず、海水が乾けば海賊が絶える。」

「十隻を残したら、やはり全部退治したとは言えない。」

「あなた方はお城の上に上がってよくごらん下さい。あなたが三回続け

て神娘を呼んで下されば、全部退治できよう。」

黄大人は二階から下りて、外の庁堂に来る。

「皆さん、家の神娘はもう退治したと言った。」

文武の役人は「彼女は家も出ないのに、もう退治したと言うのだな。あなたの法は大したものと言われるが、自分でももっと大した腕だと言っている！」と言う。

「俺もそう言った。信じないなら、お城の上に上がれば、はっきり見えると彼女は言った。」

歌う 文官は輿に乗り、武官は馬に乗って、ぞくぞくと黄宅を離れていく。

文武百官がお城の上に上がると、その有さまがはっきり見えた。

台詞 福州上港を見ると、賊船は倒れたのもあれば、ひっくり返ったものもある。まるで麦のわらを挿しているようだ。

歌う 文武百官は喜び、黄大人は大声で呼ぶ。神娘！神娘！神娘！と三回続けて呼ぶ。

神娘が印を結ぶと、三百六十隻の賊船は全部退治された。

全ての賊船が退治されてから、黄大人は輿に乗って家に帰る。

文武の役人は文書を整えて、神娘が賊を退治して大功を立てたと上奏する。

通政校門という役所に上奏書を送って、そこの太師官は君王に上奏する。

五更三刻に君王は朝廷に出て、金や鐘や玉の太鼓が鳴りひびく。

鼓楼の上には太鼓の音がひびき、鐘楼の上には鐘が鳴る。

太鼓がひびき、鐘が鳴って、文武の役人が朝廷に上がるようにと催促する。

文官は赤い着物を着て朝廷に上がり、武官は緑の着物を着て朝廷に上がる。

赤や緑を着る文武の役人は、階段の下で君王に謁見する。

君王は御座に座って話し出して、勅旨を下す君王は臣下に謁見を賜わる。

臣下たち！用があれば、今ここで上奏すべき、用がなければ朝廷の門を出ていい。

多くの文武の役人は上奏することがなく、太師官は歩き出て君王に上奏

する。

天子さま万歳、臣は一通の上奏書を呈上する。

南洋大海では金鶏賊が出て三百六十隻の賊船が掠奪を繰り返していた。

台詞 福州知府の息子の嫁、黄文淹の妻、神娘と言う者は廬山の法で三百六十隻の賊船を全部退治した、と上奏する。

歌う 万歳さまは私の上奏をお許しになり、黄の家によく恩典を賜るようにお願い申す。

君の上奏は道理があり、賊を退治して功を立てた者に恩典を与えるべきだ。

妻の功勞によって夫が恩典を受けて、黄文淹を洛原県を治める役人に封じる。

天子さまの御恩に感謝申し上げる！我が主万歳！

勅旨に感謝を申し上げてから午門の外へ出て行き、万歳さまは勅旨を伝える役人を遣わし都を出発させる。

各州、各県ではひまどらず、山に登ったり、川を渡ったりして留まらない。

州を通れば州の役人が迎え、県を通れば県の役人が迎える。

福州侯官県に到ると、都からの文書が黄宅に届く。

台詞 「勅旨がおいでになった！」「お香の案をしつらえてくれ！」「勅旨をお受けできるように！」

歌う 君王の勅旨が来たと聞くや、お香の案を庁堂の前でしつらえる。

君王と臣下の間の礼儀によって、二十四回拝んでから、朝廷からの勅旨が読まれる。

陳神娘の賊を退治する功勞は大なので、黄文淹を洛原県を治める役人に封ずる。

君王の勅旨を読んでから、勅旨を伝えた役人は復命に都へ戻る。

黄宅の老若は喜び、黄文淹は神娘に話す。

神娘の法力は本当に大したものだ。俺が役人になったのは全くあなたのお蔭によるものだ。

ほんの見込みばかりで、あなたはわたしのお蔭によるものだなどと言わ

ないで下さい。

あなた！あなたは洛原県へ赴任したら、清廉な役人となり、不正役人となっ
てはいけない。

清廉な役人になれば、名を後世にとどめ、不正役人となれば、汚名が永
く後世に残って名誉がなくなるだろう。

台詞 神娘は軽い声で話す。

歌う わたしはこの黄宅に来る前は、太っていて、元気だった。

あなたの家に来てから、この頃わたしは体がだるくなった。

ご飯もよく食べられず、あなたはよく分るだろう。

神娘は妊娠し、めでたい。この家でよく養生してくれ。

夫婦はよく話してから、外の庁堂でお見送りの酒宴を催す。

黄若旦那はお見送りのお酒を飲んでから、目上の人に拝した後旅立つ。

川辺の埠頭に舟が用意され、黄若旦那は舟に乗って旅立つ。

満潮や順風に帆を上げて走り出し、一路順風に進んで行く。

洛原県の埠頭に舟が泊ると、舟を下り、輿に乗って役所に着く。

文武の役人は出迎え、大人を迎えて役所の中へ入る。

黄文淹は印を受けて就任して、きっぱりと理法によって公事を裁く。

大事が小事に化し、小事が収まるように化する。

盗賊や邪悪な者をきっぱり逮捕し、妓女や賭博の者を容赦しない。

洛原の水を飲むが、良民の半分の銀をも不正に取らない。

この「夫人伝」に洛原県のことはさておき、後に続けて語ることにしよ
う。

この「夫人伝」には王朝大国のことを話し、蛇婆妖怪のことをさらに話
して行こう。

台詞 「わたしは都で皇后となって、なんと素晴らしいことだろう。心配する
のは陳十四のことだけだ。陳十四がわたしの手に落ちることができれば、
朝廷で彼女を除き去ってやろう。」と蛇婆は言う。蛇婆は思案をめぐらす。
今陳十四を除くことはとても容易い。わたしは皇后に化けて、病人を装っ
て万歳さまにこんな話しをしよう。夜が静まって三更になると、賢人がわ
たしに夢を賜った。大賢人の心肝を薬に入れば、病気を治す見込みがあ

る。

歌う 怪しいものの蛇婆妖怪は、わけもなく平地に狂風を起す。

蔡皇后に化けて、病気を装っている。

病状は日に日に重くなって、医者薬を飲んでも病気が治らない。

蛇婆妖怪は竜の模様のある寝台に横になり、天子さまは歩いておこしになった。

今まで皇后は無病息災だったのに、どうして今度の病気はなかなか治らないのだろう。

万歳さま！わたしはいつまでも天子さまにお仕えすることができなくなり、高い山でも四面からの風を遮ることができないというところです。

平公な神さまは俗世の災難を止めがたく、絹のひもでは風になびいている竹を止めがたいのと同じです。

月が破れれば金で補いがたく、花を移植するのに糸ではつなげない。

月を補うことや花をつなぐことができれば、俗世の人間は長生もできるだろう。

皇后！日、月、星の三光や神や仏でも災難にあうこともあるのだから、あなたも災難にあっても当然だ。

天が倒れば身分の高い人が支え、凶事に会っても吉事に変えられる。

わたしは昨夜の三更に夢を見た。夢の中で天上の神さまに会った。

もし大賢人の心肝を薬に入れて飲めば、わたしの病気を治すことができる。

大賢人の心肝を薬に入れることができれば、わたしの病気は治る見込みがない。

大賢人はどこにいる人か、さっそく朕にその人の来歴を言ってくれ。

万歳さま！わたしは死んでも大したことではなく、他人を巻添えにしていけない。

皇后！大賢人の心肝で病気を治すことさえできれば、その賢人に厚く恩典を与えてやろう。

万歳さまが恩典を与えることさえできれば、わたしはその人の来歴を申し上げよう。

その人は福州侯官県生まれ、臨水中村の陳姓の者だ。
彼女の父は上元といい、母の姓は葛という。長兄は法通、次兄は法青だ。
三番目の陳十四は、廬山の洞で法の伝授を受けた。
道中妖怪を退治して人を助けた。彼女の法名は廬山神娘という。
黄文淹の妻は廬山の法に精通し、知府の息子の嫁は陳の家からの者だ。
南洋大海で賊船を退治して、民衆のために害を除いて大功を立てた。
万歳さまは恩典を与えてやるなら、この人は大賢人そのものだ。
この話を聞くと、君王は嬉しくなって、一枚の勅旨を都から出発させる。
君王の急用は消火と同様なことで、日夜休みなく福州城へ急いで行く。
君王の文書が黄宅に着くと、黄宅の門番は主人に知らせる。

台詞 「勅旨が来られた!」「お香の案をしつらえよ!」「勅旨を迎えよ!」

歌う 廬山の法を修得した神娘は知らせを受けると、勅旨をもたらした役人に
謁見する。

お香の案を庁堂の前にしつらえ、神娘は二階を下りて勅旨を迎える。

君臣の礼儀によって二十四回拝んでから、勅旨が読み上げられる。

朝廷の蔡皇后は病気に罹って、薬を飲んでも効かず、病気がひどく
なっている。

十四の心肝を取り出して薬に入れると、皇后の病気を治す見込みがある。

神娘はこのことを聞くと、びっくりして、気が遠くなって地に倒れた。

台詞 勅旨官は「賢人目をさまして!賢人目をさまして!」と言う。

歌う このことはさておき、勅旨官大人をよくもてなす。

廬山神娘は家の中に入って、目上の舅さまを拝んだ。

台詞 「お父さん!大変なことが起った。」「どんな大変なことか。」「外の庁堂
に勅旨官が来た。」「何のことか。」「朝廷の皇后が病気に罹ったので、私
の心肝を取り出して薬に入れるために来た。」

「本当か、うそか、全くとんでもない話だ!」

歌う 君は臣を死なせようというなら、死ぬべきで、それは世間の大忠臣だと
言えよう。

わたしは君王を助けるのは当たり前だが、お年寄りのお父さんは誰に頼る
ことができようか。

庁堂の香火を奉じる人がいなくなり、文淹は役人となってこのことを知らない。

天が倒れば、身分の高い人が支え、凶事に逢えば、吉事に変えることもある。

良い人間には神さまの助けがあり、日、月、星の三光さまは厄払いしてくれる。

やさしい言葉で神娘を慰め、ひそかに消息を陳宅に送る。

老法師はびっくりして慌てだし、法青は来てゆっくり話します。

台詞 「お父さん、黄一黄宅からどんな便りが来たか。何のことか。」「朝廷の皇后が病気にかったので、お前の妹の心肝を取り出して薬に入れると言われた。」と老法師は言う。「お父さん！心一肝を取り一り出すとはひどく痛いだろう。」「痛むどころか、その人は死んでしまうのだ！」

「天宝さま！あなたの皇后は人間で、俺の妹も一も人間だ。どうして人間が人間を食べたいのか。俺一俺にとってはただ一人の妹だ。俺は行ってみよう。」

歌う 二法師は衣冠を整えて、急いで城内に入る。

途中留まることなく黄宅に来て、黄宅の奥の方へ入った。

台詞 「妹さん、天宝王のお后様が病気にかったので、お前の心肝を取り出して薬に入れるというのか。それはとんでもない。お前は行ってはいけない。門前の階段の下で二枚の符呪を焼いて、あのお后様を焼死させてやろう。」「お兄さん！」と陳十四は言う。

歌う 君が臣を死なせようというなら、死ぬべきだ。それは世間の忠臣だと言えよう。

台詞 「妹さん！人間は人間を食べる道理がない。あいつはきつと妖怪だ。お前は占いをしてごらん。」と二法師は言う。

「そうだ！」と神娘は言う。神娘は竜鳳の占いをしてみると、「ああ！これは南江の蛇婆妖怪だ。わたしは剣で蛇妖の尾を三尺斬り落した。その後、あいつは王朝大国へ逃げて、蔡皇后を殺し、自分が皇后に化け、三十六の妃や四十八の宮仕えの女を食ってしまった。あいつはわたしに仇討するつもりだ！あなたは早く家に帰って、お父さんに話して下さい。わたしは妖

怪退治のために都に行く！」

歌う 二法師は嬉しくなって、黄宅を離れて行く。

途中留まらずに家に帰って、目上の人に知らせる。

妹は妖怪退治のために都へ行って、蛇婆妖怪を絶滅させる。

陳宅の老若は喜んだ。このことはさておき。

さらに、盧山の法を修得した神娘は、目上の舅さんに知らせる。

台詞 神娘は外の庁堂へ行って話し出す。

「勅旨官大人！皇后さまは病気にかかっているのです、もとよりあなたは取り出した心肝を持ってお帰りになるはずだが、道があまりにも遠く、お天気があまりに熱く、取り出された心肝が食べられなくなるでしょう。わたしはあなたと一緒に昭陽宮に行って、その場で取り出して献上しよう！」

「俺は心肝を取り出すことができないと心配していたが、彼女は食べられないことを心配している。賢人さん！君は輿に乗るか、馬に乗るか。」と勅旨官は言う。「わたしは輿に乗らない、馬にも乗らない！」「君は舟に乗るか。」「舟に乗る。わたしは舟を持っている。」「そうか。俺二人も一緒に乗れるか。」「大きな舟だから、お二人一緒に乗ってもいい。お二人は目を閉じて、わたしの背中にもたれて下さい。」「賢人さん！あなたは俺二人を害さないで下さい。俺たちは君王に遣わされた者で、咎めないで下さい！」「よけいなことを言わないで、目をよく閉じて、わたしの背中にもたれて、早く歩いてきなさい！」

勅旨官はやむを得ず、彼女の背中にもたれて歩くより外しかたがない。

「階段、上がって、歩みをちょっと止めて、そのままじっとして、埠頭だ、歩み板に気をつけて。舟の中に入って、座りなさい。」

「女將軍、この舟は非常に大きいね！」と勅旨官は言う。

「大声で叫んでもかまわない！目をよく閉じて、開いてはいけない。舟が着いたら、わたしはあなた方に知らせる。」と神娘は言う。

神娘は祖師の案をしつらえる。

歌う 頭に神雲や神額をかぶり、身に神衣や神袴を着る。

足もとに古い具が置かれ、手で印を結び、口で盧山の玄妙な法の本を唱

える。

左手に鈴を持ち、右手に竜角を持って、竜角の音がぴいぴいと霊壇にひびく。

始めにぴいぴいとひびくと、草の舟が彩色の竜舟に化する。

山に逢えば、山の上を通り、川に逢えば川の上で漂って行く。

山よ！山よ！山よ！

三回の竜角の音や七回のドラの音がすると、草の舟の化した舟は殿堂の前に着いた。

台詞 「勅旨官大人！着いた！」「冗談はよせよ、ここに座っていて臂も暖かくならないのに、俺たちを騙さないで下さい。」「あなた方を騙していると言うのか。あなた方は都の出身でしょう。ここの話の調子を聞いて下さい。」

勅旨官が聞いてみると、本当に都の調子だ。

勅旨官は「女將軍、まず俺たちに目を開けさせて下さい！」と言う。「いいのよ！目を開けてごらん。」

目を開けてみると、本当に着いた！本当に都だ。俺たちは非常に大きな舟だと思ったが、もともと一つの稲のわらの輪だ。

神娘は勅旨官と一緒に上陸してから、廬山の兵を遣わして、まず千斤槌で妖怪をしっかり打付けておく。

妖怪はちょうど考えながら、占ってみた。おや！来た！頭をもたげて、尾を垂れたり、尾をもたげて、頭を垂れたりする。わたしは彼女がもう倒されてしまったと思ったが、今度は彼女は召されて来て、自らおとし穴にかかるだろう。

歌う 神娘は朝廷の殿堂に案内されて、天宝万歳さまの前に来た。

神娘！ここは朝廷の殿堂だ、さっそく心肝を取り出して皇后を助けてくれ。

台詞 わたしはまず上奏してみよう。「万歳さま、もともと心肝を取り出すべきだが、万歳は男の方でわたしは女、男女の別がある。昭陽宮のその場で心肝を取り出して、その場で皇后さまに献上しよう。」

「陳神娘、お前の上奏は道理にかなう。」万歳さまは神娘を昭陽宮まで連れて行った。「神娘！」

歌う　　ここは昭陽宮だ、さっそく心肝を取り出して皇后を助けてくれ。

台詞　　神娘の考えでは、ここは他の役所の比ではない。ここでは早く手を下す者が仙人になり、おそく手を下す者が滅ぼされてしまう。

歌う　　一口の水を噴出してやるなり、妖怪は直ちに正体を現わす。

台詞　　神娘は金の鉤で蛇妖をしっかり吊っておき、八卦圧身の訣で万歳さまを近寄せる。神娘は唱える。

歌う　　万歳さま、万歳さま、あなたの皇后の姿は変だ。

人間の頭、蛇の体、体の肉が銀のように白い。

台詞　　万歳さまの考えでは、「朕の皇后は髪の毛が黒く、皮膚が白い。彼女の言う姿が全く違っている！」万歳さまは彼女の言うことはちょっとおもしろいと思って、竜の模様のある寝台の中を見るや。

歌う　　神娘は妖怪をひっぱり出すと、妖怪は鱗を開けて万歳さまの顔にぶつかった。

万歳さまはびっくりして転がった。盧山神娘はにこにこ笑う。

台詞　　「万歳さま！あなたは惜まずにこの妖怪を斬ることを許すか。それとも、斬ってしまうに忍びないで、そこに置いたままよく見るか。」「斬って！妖怪を斬ってくれ！」と万歳さまは言う。

歌う　　千年の妖怪を滅ぼすべきで、万年の妖魔の種を絶つべきだ。

一本の神剣を振回すと、蛇婆は頭が断たれ、血塗れになる。

火で妖怪の頭を焼いて消滅させてから、昭陽宮の中は太平になる。

台詞　　神娘は妖怪の尸を冬瓜を切るように切った。「万歳さま！石の櫃ひつはあるか。」「石の櫃はある。」「鉄の櫃はあるか。」「鉄の櫃はある。」「鉄の櫃を運んで来て下さい。」

神娘は神の呪文を唱え、印を結んだ。千年までも朽ちず、万年までも腐らない。妖怪の尸を鉄の櫃に入れて、蓋をする。神娘は呪文を唱え、鉄の櫃は石の櫃に化す。

「盧山の兵！」と神娘は言う。「はい！」

歌う　　この櫃は臨水廟に置かれた。その後、神娘は悟りを開く時に臨水宮に休む。

石の櫃が臨水廟に置かれ、万歳さまはゆっくり話します。

神娘の法力は実にすばらしい、おかげで妖怪が退治され、君王が助けられた。

台詞 妖怪を退治した。皇后を救助する。

歌う 廬山神娘は骸骨を並べておき、白骨煉丹の法で皇后を救助する。

麦粉を体に変じ、酒を血に変じ、赤や緑の糸を筋にして並べておく。

魂を戻す髪を頭につけ、魂を戻す衣を体にかけておく。

靈験のある符呪四枚を貼り、生き返らせるために胸に貼っておく。

お香を焚く前に、祖師の案をしつらえ、壇に立って法を行って人間を助ける。

神娘は祖師の壇を立てる。

頭に神雲や神額をかぶり、身に神衣や神袴を着る。

足もとに占い具が置かれ、手で印を結び、口で廬山の玄妙な法の本を唱える。

九層の台に変じられる九枚の紙や、四本の竹竿に変じられる灯心草を取り出す。

三に三をかけて、手で九回続けて印を結ぶと、九層の台が高々と聳える。

神娘は九層の台の上に上がって、壇に立って法を行って威風を示す。

左手に鈴を持ち、右手に竜角を持って、竜角の音がびいびいと靈壇にひびく。

二回目に竜角がびいびいとひびいて、その音が廬山、茅山にひびきわたった。

神兵、神将、雷兵、地將、三壇の神々は得勝壇に集まる。

三回目に竜角が雷の震えるように、その音が冥土までひびいた。

蔡皇后は竜角の音を聞くと、その呼び出しに応じて急いで香壇に上がる。

内壇娘々馬一駕、皇后さまは生き返って来る。

生き返って来ると、手足をひくひくと動かし、生き返って顔立ちももとのようになる。

生き返ってしゃっくりもでき、大声で叫び続ける。

わたしは死んで苦しんでいたが、どこからの恩人が助けてくれたのか。

廬山神娘が救いの神だと分ると、身を起して大恩人を拝む。

天宝万歳さまは喜んで、陳神娘に話します。

台詞 神娘！お前は妖怪を退治して皇后を生き返らせた功労は大だ。三十六人の妃をも生き返らせてくれないか。

台詞 神娘は三十六人の妃を助ける。その骸骨を一握り、一握で取り出して、天秤にかけてから、神娘は白骨煉丹の呪文を唱える。

歌う 麦粉を体に変じ、酒を血に変じ、赤や緑の糸を筋にして並べておく。

左の心肝や肺腎は、黄色い木や黄金を変じさせる。

変じた心肝が胸の中に入れられ、内臓全体がそろろう。

魂を戻す髪を頭につけ、魂を戻す衣を体にかけておく。

各各靈験のある符呪四枚を貼り、生き返らせるために胸に貼っておく。

神娘は手で印を結んで、何回も整えてやると、人間の姿に変じさせる。

その前で祖師の案をしつらえて、壇に立って法を行って三十六人の妃を助ける。

左手に鈴を持ち、右手に竜角を持って、竜角が三回続けてひびく。

竜角の音が望郷台にひびきわたって、三十六人の妃が竜角の呼び出しに応じて香壇の上に上がる。

内壇娘々三十六駕、三十六人の妃が生き返って来る。

生き返って来ると、手足をひくひくと動かし、生き返って顔立ちももとのようになる。

生き返ってしゃっくりもでき、大声で叫び続ける。

姉妹たちは死んで苦しんでいたところで、どこからの恩人が助けてくれたのか。

盧山神娘が救いの神だと分ると、身を起して大恩人を拝む。

万歳さまは喜んで、神娘に話します。

台詞 神娘！お前は三十六人の妃を生き返らせた功労は大だ。お前はさらに四十八人の妾をも生き返らせてくれ。

「万歳さまは満足ということを知らない。わたしは三十六人の妃を生き返らせたが、さらに四十八人の妾を生き返らせてくれと言う。四十八人の妾を生き返らせるなら、さらに宦官や宮仕えの女をも生き返らせてくれと言うだろう。わたしは先に上奏してみよう。」と神娘は心の中で思うと、

「万歳さま！四十八人の妾さんを助けるべきだが、宦官や宮仕えの女たちは別にして下さい。」と言う。「神娘！お前の言うことは道理にかなう。」

神娘は宮中の骸骨を全部運び出して、天秤にかけてみる。骸骨には軽いものもあれば、重いものもある。重さ一銭のものもあるが、蔡皇后さまの骸骨がもっとも重く、重さは一両三銭三だ。

歌う 陳神娘は骸骨を並べて、白骨煉丹の法で人を助ける。

麦粉を体に変じ、酒を血に変じ、赤や緑の糸を筋にして並べておく。

左に変じた心肝や肺腎を入れておき、内臓全体をそろえる。

黄木や黄金を、心肝に変じて胸に入れておく。

魂を戻す髪を頭につけ、魂を戻す衣を体にかけておく。

各各靈驗のある符呪四枚を貼り、生き返らせるために胸に貼っておく。

神娘は手で印を結んで、何回も整えてやると、人間の姿に変じさせる。

台詞 陳神娘は壇に立って法を行って人を助ける。

歌う 左手に鈴を持ち、右手に竜角を持って、竜角の音が三回ドウドウとひびく。

竜角の音が五方へひびきわたると、四十八人の妾が竜角の音を聞いて香壇に上がる。

内壇娘々馬四十八駕、四十八人の妾が生き返る。

姉妹たちは死んで苦しんでいたが、どこからの恩人が助けてくれたのか。

廬山神娘が救いの神だと分ると、身を起して大恩人を拝む。

万歳さまは喜んで、神娘に話しだす。

妖怪を退治して皇后や妃たちを助けた功労は大だ。竜鳳紅茶を神娘に賜わる。

神娘は竜鳳紅茶を受取ると、竜鳳紅茶を地面に抛り出す。

地面に抛り出された竜鳳紅茶は、紅州の火事を消火する。

万歳さまは怒り出して、神娘をぽんぽん罵りつける。

お前神娘！竜鳳紅茶を地面に抛り出して、殿堂で君王を侮ることは大罪になるのだ。

台詞 わたしは妖怪を退治して、皇后を助け、三十六人の妃や四十八人の妾を助けて上げたのに、一膳のお茶を抛り出したことだけで、わたしが殿堂で

君王を侮ったと言う。わたしは実状を上奏しよう、と神娘は考えた。

歌う 万歳さまに上奏申す。紅州の火事が三昼夜続いて、百姓たちが害された。
竜鳳紅茶を地面に抛り出したのは、紅州の火事を消火するためだった。

台詞 「お前の法力が大きいと言われるが、お前はみずから尊大ぶっている。
お前がここでお茶を抛り出して、紅州の火事を消火できるものか。ここから紅州へ急いで馳せおもむいても、七昼夜でやっと着く。お前の言うことが本当かどうか分からない。まずお前をしばらく牢屋に入れておこう！」

歌う 万歳さまはばか者だ。神娘は牢屋に入れられて苦しみを受ける。
内壇娘々馬一駕、神娘は牢屋で苦しんでいる。

台詞 「ここに閉じ込められた以上、じっとこらえよう。天下を見回って民衆を助けたが、こんな難儀はなかった。これは国家の掟だから、しばらく堪えよう。七日間立つと、火事を知らせる文書がきつと都に来るのだ。」と神娘は言う。

歌う この「夫人伝」には盧山の法のことはさておき、七日目に火事の知らせが都についた。

通政校門という役所で登録し、校門の太師官は君王に上奏する。

五更三刻に君王は殿堂に登り、金の鐘、玉の太鼓の音がひびきわたる。

鼓楼の上では太鼓の音がひびき、鐘楼の上では鐘が鳴る。

太鼓の音がひびき、鐘が鳴って、文武の役人が朝廷に参内することを催促する。

文官たちは東方門から入り、武官たちは西文門から入る。

君王の親戚は中門から入り、上下三つの階段の下で臣は君王に謁見する。

君王は宮殿の中に座って話だし、臣に会って勅命を出す。

用があれば、この場で上奏し、用がなければ午朝門を出て帰れ。

文武の役人は上奏書がなく、太師官だけは歩き出て君王に上奏する。

臣は万歳さまに上奏することがあり、その事情を申し上げる。

紅州では火事が三昼夜続いたので、百姓たちが害された。

五更三刻に三陣の赤い大雨が降って、紅州の火事を消火した。

上奏したことは大切なことだ。紅州に十万両の救済の銀を与えるように。

田畑の税を免除するように。文武の役人は君王に拝謝する。

勅旨に拝謝してから午門を出て、文武の役人は朝廷を離れて行く。

台詞 「神娘の法力は本当にすばらしい。一膳のお茶を地面に抛り出すと、紅州の火事を消火した。功があるから封じてやるべきだ。陳十四を宮殿に連れて来させ、功によって封じてやる。」と天宝さまは言う。

「万歳さまに感謝申し上げる！」陳十四を牢屋から出して、宮殿で万歳まさに謁見させる。

歌う 神娘！神娘の玄妙な法力は本当にすばらしい。朕はこの宮殿でお前に栄典を賜わる。

盧山で法の伝授を受けた功労は大だ。朕はこの宮殿で一つの恩典を与える。

道中で妖怪を退治して来たが、銀を受取らない、朕はこの宮殿で二回目の恩典を与える。

南江の蛇妖を斬殺する功労は大だ。朕はこの宮殿で三回目の恩典を与える。

南江の海賊を退治した功労は大だ。朕はこの宮殿で四回目の恩典を与える。

妖怪を退治して皇后を助けた功労は大だ。朕はこの宮殿で五回目の恩典を与える。

三十六人の妃を助けた功労は大だ。朕はこの宮殿で六回目の恩典を与える。

四十八人の妾を生き返らせた功労は大だ。朕はこの宮殿で七回目の恩典を与える。

紅州の火事を消火した功労は大だ。朕はこの宮殿で八回目の恩典を与える。

内壇娘々馬八駕、君王の八回の恩典を受けた陳太陰。

台詞 以上は八回の恩典、後さらに二回の恩典、君王の十通の勅旨、陳十四大徳女神さまは十回の恩典や十通の勅旨を賜わった。

歌う 昭陽宮で祝宴を催し、君王は神娘に輿を賜わる。

神娘はこの輿が気に入るが、まずこの国の都にあずけておく。

神娘は悟りを開く時に、この輿に乗って都を出ることにしよう。

神娘！外国から貢物の玉仙亀を捧げて参った。この一對の玉仙亀をお前に与える。

台詞　万歳さまのお考えは分らない。黄金、白銀、絹などを与えず、わたしに亀を賜わった。断れば、わたしが宮殿の中で君王を侮ると言うだろう。これを持っていれば、神娘が銀を受取らないと言うのは口先だけだと他人に言われるだろう。仙亀を受取れば、噂されるのだ。ああ！まず、これを持って行こう。さらによく考えてみようと思娘は思った。

歌う　万歳さま！わたしは玉仙亀を大切に致す。神娘は亀を持って旅立つ。
皇后や妃は見送り、文武の役人も神娘を見送る。
内壇娘々一駕雲一片、廬山神娘は雲に乗る。
雲に乗って王国の都を出て、天下を見回って民衆を助ける。